

学校教育高度化センター関連事業（イノベーション科研）

基幹学習ユニットにおける本年度の活動

報告者 市川 伸一（教育心理学コース教授）

1. 基幹学習ユニットの役割

基幹学習ユニットは、これまでの学校教育の中で、内容的には教科や「総合的な学習の時間」などで行われていた学習を、「社会に生きる学力」という視点から見直し、新たなカリキュラムとして導入しようとするものである。

以下では、それぞれのプロジェクトの担当者が、進捗状況を報告する。（市川伸一）

2. 各プロジェクトの進捗状況

(1) 学び方の学習プロジェクト

本プロジェクトでは、効果的な学習方法（学習方略）や学習に対する考え方（学習観）を身につけた学習者を育成することを重視し、教科教育や総合的な学習の時間の中でこれらを育成するためのカリキュラムを開発することを目指している。これまでも学習方略や学習観の改善を促す授業実践を小学校、中学校、高校において行ってきた。本年度は最終年度であることを踏まえ、こうした試みを継続するのみならず、発達段階に応じたカリキュラム案を提案し、附属の教員とともに検討した。また、9月7日には、本プロジェクトに参加している附属の教員を登壇者に迎え、メタ学習をテーマとしたシンポジウムを行った。ここでは、附属の教員から、数学や社会の授業や総合的な学習の中で行った学習方略育成のための試みが紹介された。必ずしも効果が見られたという内容ばかりではなかったが、単発の授業として学習方略や学習観の改善を促すことの難しさが話題にのぼり、普段の指導においてどのように指導していくべきかなどが議論された。このシンポジウムの内容は現在報告書にまとめているところであり、最終的には東京大学の機関レポジトリを通じて発信する予定である。（市川伸一・植阪友理）

(2) 言語力育成プロジェクト

本プロジェクトでは、中等教育段階において、英語科、国語科という、両言語教育教科を横断して、メタ文法能力を育成する文法指導カリキュラム開発を行うことを目的としている。これまでも文法指導で独自のカリキュラムや授業方法を試みている東大附属中等教育学校英語科、国語科の先生方との連携協力の中で3年間、カリキュラム開発に取り組んできた。

3年目の本年度は3点のことを行った。第一には、これまでの先行研究のレビューをまとめた。また第二は、前期、後期の2回、東大附属中等教育学校5年生3クラスを対象に、英語科、国語科それぞれの教科授業内においてメタ文法育成のためのデザイン実験授業を行っていただいた。英語科では沖浜先生がFocus on formの視点からメタ文法授業の実践の開発に、国語科では大井先生が時制に焦点をあて漢文、古文と英語をつなぐメタ文法授業実践の開発に取り組み参観分析検討を行った。また第三には、一昨年度、昨年度データから、2本の研究論文を教育学研究科紀要に、「メタ文法カリキュラムの開発：中等教育における国語科と英語科を繋ぐ教科横断カリキュラムの試み」「文法学習に関わる要因の教科横断的検討：文法課題遂行と有用感・好意度・学習方略間の関連」としてまとめた。今後さらに本プロジェクトを軸にしながらか本としてまとめ刊行する予定である。

（秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦）

(3) 数理能力の育成プロジェクト

本プロジェクトでは、社会に生きる数理能力を育成する授業過程やカリキュラムを心理学の

視点から解明することを目的としてきた。2013年度は、東京大学教育学部附属中等教育学校の3年生を対象として、日常的事象に即して立体図形と関数の最大値・最小値という異なる単元を関連づける学習内容として、牛乳パックの体積が最大となる条件を推理する授業過程等进行分析した。個別探究→協同探究→個別探究という共通の展開で、協同探究時にクラス全体の討論を重視するクラスとグループ内の交流を重視するクラスの間で、各生徒の個別探究時の記述内容や協同探究時の発話内容を対比的に詳細に分析した結果、日常的事象に関連づけた発問や場面設定は数学的知識に限定されない多様な知識の活性化と構成を促すことや、協同探究時の学習方法の選択は、数学としての本質的理解を深めるか、日常経験と関連づけて理解を広げるかという異なる方向での探究をもたらし可能性が示唆された。また、同校の別単元の数学授業や、名古屋大学教育学部附属中・高等学校の数学・理科の授業においても同様に、日常的事象に関連づけた発問や教材の効果等を検討した。

(藤村宣之)

(4) 探究型学習プロジェクト

東京大学教育学部附属中等教育学校の卒業研究を中心に検討してきた。今年度は過去2年間に引き続いて、卒業研究テーマに合わせた図書室資料の整備、機器の整備(PC等の機器の導入)書き終えた6年生に対するアンケート調査を実施した。今年度は最終年度ということもあるので、まとめのための議論の場を設けた。11月3日(日)に同校を会場にして、公開研究会「中等教育における卒業研究カリキュラム：学校図書館サービスを視野に入れて」を開催した。講師に市川伸一教授、竹林和彦教諭(渋谷教育学園渋谷中学校高等学校)を迎えての講演と筆者の報告のあと、附属学校の卒業研究の説明と卒

業生による報告があり、そのあと72人の参加者が3つの分科会に分かれて討論し、それを最後にまとめる会をもった。討論は報告書にまとめて刊行している。

*

探究型学習は習得型学習と並んで現行カリキュラムでの柱とされているが、実際にはそれに焦点を当ててしっかりとカリキュラム展開をしなければ中途半端に終わる可能性をもっている。まして、個々の学習者がしっかりと研究をして論文としてまとめることを課す卒業研究を指導することは容易ではない。先進的な学校でも試行錯誤しながら進めていることを確認することができた。ひとつのポイントは大学への接続であり、とくに入学試験が習得型学習の成果だけではなく、探究型学習の成果を評価することになったときに変化する可能性を指摘することができる。

(根本 彰)